

例・集会スケジュール

- 12/14(日)      ボッカ  
                 菊水～菊水ルンゼ～摩耶山  
                 前夜 20:00 平野  
                 当日は 9:00 までに現地  
                 へ  
                 C.L. 長島
- 12/21(日)      冬山準備会及び買い出し
- 12/27～1/4      冬山合宿 A 班
- 12/30～1/4
- 1/11(日)      装備返還    9:00 研修所  
                 反省会    10:00    "  
                 新年会    13:00 前田氏宅
- 1/18(日)      百間滝 / アイゼンテクニック  
                 前夜 20:30 阪急六甲  
                 保壘にてピバーク  
                 C.L. 幸内、田中
- 1/25(日)      氷ノ山ツアー 未定  
                 C.L. 幸内、田中

月

報

神戸山岳会

No. 79

50. 12. 10

発行 神戸山岳会

神戸市生田区中山手通1丁

目105の9 前田方

編集 星野・片山・長島

— 目 次 —

冬山合宿計画概要	.....	1
装 備 移 動	.....	1
例 会 報 告	.....	2
個人山行記録	.....	4
富士山に登る	..... 前 田 浩	4
雨 飾 山	..... 新 川 利 夫	5
北 岳 (記 録)	..... 星 野 辰 也	8
第四尾根・中央稜	..... 長 島 安 代	9
北岳バットレス	..... 田 中 正 裕	9
残念だった北岳山行	..... 鮑 碧 琴	10
甲斐駒沢登り (記 録)	..... 星 野 辰 也	11
黄蓮谷廻行	..... 星 野 辰 也	11
尾白川本谷廻行	..... 鮑 碧 琴	12
京都北山	..... 新 川 利 夫	13
大峰・弥山〜前鬼	..... 鮑 碧 琴	14
大台・大杉悠歩	..... 片 山 富 美 子	15
雑 感	.....	16
山を想う一日	..... ないとう まさし	16
「但馬をめぐる山々」改訂版を	..... 武 田 禎	16

## 冬山合宿計画概要

A班 濁沢岳西尾根～奥穂高岳

12.27(土) 大阪出発(北国22:10発)

12.28(日) 神岡～新穂高～白出し出合～濁沢岳西尾根C<sub>1</sub>(2100m)

12.29(月) C<sub>1</sub>～蒲田富士(BASE)C<sub>2</sub>

12.30(火)～1.2(金) 好天日を確認して蒲田富士(BASE)～西尾根～濁沢岳～白出しコル～奥穂高岳をアタックして、蒲田富士(BASE)に戻る。

1.3(土)～1.4(日) 蒲田富士(BASE)～白出し出合～新穂高～帰神

参加予定者 CL野上①、SL金田、幸内、星野、間島、田中

B班 南アルプス 仙丈岳地藏尾根

12/30 大阪発

31 市野瀬～柏木部落～地藏尾根1983mコル

1/1 コル～松峰～地藏岳コルB、C.

2 B、C.～仙丈岳アタック

3 予備日(冬山訓練)

4 下山(同ルート)

参加予定者:岸本、内藤、野上<sub>3</sub>、三浦、数野、魚谷、長島、鮑。

## 装 備 移 動

去る9月21日(日)、強歩例会の後、午後から装備保管場所の移動が行なわれました。今まで宮本氏宅で保管されていた会装備を登山研修所で整理、下記の場所をお借りして装備を保管することになりました。

内藤氏宅

▽657 神戸市灘区高徳町5丁目3-1 TEL 078-851-1115

・登攀具(ザイル10本、ユマール、クログガー、アイスバイル2本)、吊りテント2張、ツェルト2張、夏テント2張、コンロ2台、コッヘル1セット。

岸本氏宅

▽653 神戸市長田区北町2丁目119 TEL 078-575-6237

・合宿用具(夏テント5張、冬テント5張、ラジウス6台、なべ大2、中2、コッヘル3、医務箱1、ポリタン5、雑品一式)本。

なお、これは適当な保管場所が見つかるまでの一時的な処置ですので、ご了承願います。

## 例 会 報 告

8月31日 保壘岩RCT

内藤、宮本、岩崎、長島、鮑

RCT例会にはメンバーの少ないのに驚く。真水谷をつめて直接、保壘岩に出る。宮本一岩崎、内藤一長島一鮑、のパーティに分かれて登る。東稜、中央稜と3本登ると切りあげて、ダイヤモンドポイントから石楠花谷へ。暗い陰湿な谷も下のほうにいくと、大きな石と青く澄んだ水となる。表六甲と裏六甲の谷の持ち味を一日で味わうことができた。

9月7日 妙号岩、城ヶ越RCT

野上①、野上③、星加、内藤、宮本、三浦、星野、幸内、田中、桂正、岩崎、井上、長島、鮑暑さと蚊の大群に睡眠を奪われ、前夜から泊まり込んだ連中は少々バテぎみ。ジリジリと強い日射しを背に受け、「南無阿弥佗仏」の字を見上げながら、それでも、中ノ壁、奥ノ壁と登っていく。午後、菊水ルンゼを通り城ヶ越へ。ここではハチたちに追われ、満身に登れずじまい。最後にハチの巣めがけて石を投げ、退散する。

9月21日 強歩 長峰一杉谷

岸本、野上①、野上②、幸内、田中、魚谷、井上、長島、鮑、米田

長峰の急な坂を登りきり、沢をつめて天狗岩へ。そこから杉谷峠をへて杉谷堰堤へ。そしてその後宮本氏宅で装備移動が行なわれた。

9月28日 保壘岩RCT

野上①、野上②、野上③、内藤、宮本、三浦、古賀、星野、幸内、田中、井上、岩崎、米田、長島

前夜、内藤氏宅に集合。車の都合により雪彦山RCTが保壘岩に変更となる。総勢13名、西稜の頭を占領する。いつになく調子づいた夜。次の日、新人は東稜から、他は中央稜を一斉に登り出す。十分に登り終え、冬山の話にも花が咲き、後、馬力のある連中は宝塚へ、残りは油コブシをおりる。

10月5日 月見コンバ

野上③、三浦、宮本、星野、幸内、田中、井上、長島、鮑

前夜、油コブシでおでんの月見コンバ、寂しいかぎりのメンバー。台風が接近しており、風雨も激しくなってくる。翌日、天気回復を待ち、山上まで登り摩耶からトウエンテイクロスへとおりました。

10月19日 保壘岩RCT

記録 : 鮑

18日: 新川、岡崎、野上①、野上②、内藤、三浦、宮本、幸内、田中、岩崎、魚谷、鮑

19日: 野上①、野上②、三浦、宮本、幸内、田中、岩崎、魚谷、鮑

不動岩RCTだったのが、急遽変更して、前日夜は新川先輩宅で、冬山合宿のことについて皆が集まり、翌日は保壘岩で岩登りをした。古い先輩たちの経験や有意義な話が聞かれ、たいへんよかった。

冬山合宿まであと二ヶ月！ 着実に準備して行こう！

10月26日 ボッカ 菊水-摩耶山

野上①、野上②、野上③、三浦、幸内、田中、岩崎、魚谷、長島、鮑、米田、南、川島  
さあ、今日から冬山のトレーニングである。目標山域も決まり、全員30Kg以上を担ぐ。階段上になつた菊水の登りを越し、城ヶ越の水場で昼食。出発の時、南さん、川島さんに出会い、合流する。偶然の出来事ではないらしい。鍋蓋の登りでは、野上1号さん■世たちに励まされ、最後の天狗岩も全員登りきる。暗くなった青谷道を一路下山。

11月9日 不動岩RCT後、強歩六甲越え

三浦、古賀、幸内、田中、白木、長島、鮑

3パーティに分かれる。古賀-幸内、人工ルートで苦しめられている。田中-白木、西稜。三浦-鮑-長島、正面菱形ルート。午前中で切りあげ、1:00道場を後にして、水量の増したた鎌倉峽をつめる。5:00船坂橋、石ノ宝殿に出てきた時は、もう真暗で、有馬の町のあたりが素晴らしかった。後はもう下り、東おたふく山で休憩した後、8:00芦屋にたどりつく。

11月16日 強歩 丹生-石峯寺

野上①、野上②、野上③、内藤、間島、三浦、幸内、田中、魚谷、井上、長島、鮑

心配されていた私鉄ストも解除となり、予定通り丹生から石峯寺まで、晩秋の紅葉の中を霧雨に濡れながら行く。志久峠との出会いで昼食をとり、3:00石峯寺着。

11月23日 講習会

アイゼンテクニック 芦屋

岸本、内藤、三浦、幸内、田中、魚谷、長島、鮑

今日は、アイゼンテクニックの講習会。A懸でアイゼンをつけてバランスの練習。砂地ではコンティニュアンスの練習。その後、レンジャー部隊よろしく、チロリアンを行なった。

11月30日 六甲全山縦走

記録 : 鮑

野上①、三浦、幸内、田中、鮑、長島

運悪く勤労者山岳連盟の縦走大会とぶつかり効果的なトレーニングを行なえなかった。パーティも二つに分かれてしまい、先行は、摩耶山を12:00に通過して、最高峰から塩尾寺まで一時間で走りおり、3:30宝塚に到着したようだ。私は遅れて6:30到着。

以下、私のコースタイム。

29日 塩屋21:30~旗振山22:00

30日 鉄拐山6:58~萩の寺8:30~菊水山10:52~市が原12:00~(黒岩尾根を経て)摩耶山14:15~記念碑台15:25~一軒茶屋16:30~塩尾寺18:

30~宝塚駅18:45

# 個人山行記録

## 富士山に登る

前田 浩

恥かしい話だが、私は富士山頂の3776.5メートルの三角点のある剣ヶ峰に登ったことがない。それに今年はやむを得ない事情の下に兵庫県山岳連盟のP-29登山隊々長ということでネパールヒマラヤに出掛けたが、隊員たちの頑張りも空しく登頂は成らずに帰途5170メートルのラルキヤパンジャンを越して、マナスル背面を流れるマルシャンディに沿って帰路についた。5170メートルの峠は馬の背にゆられて登ったし、かろうじて自分の足で登ったのは4100メートルのベースキャンプまでであった。どうしても情けなくて、今年の夏は富士山に登ってきてやろうと思っていた訳である。富士山へは過去に、11月の御殿場口、1月の吉田口と2度ばかり行った事はあるが、剣ヶ峰には登った事がない。こんな話をしても、日本の代表的な富士山に登っていないなんて誰も思っていないだろうし、富士山の話が出て、ええ加減に話を合していた、というのが本音である。これでは自分の心の中で忸怩たるものがあるのは、なくとなく面白くない。

しかし、富士山の夏の様子を伝える週刊紙や、テレビを見ると、延々と続く登山者の行列や、空缶の山の話などを聞くと、何となく気が進まない。それが遂に、8月20日から21日にかけて会員片山英一氏と2人の富士登山に踏み切ったのは、お盆も過ぎたし、台風5号も去った後だから、という訳である。

新幹線の三島駅に下車したのは10時前で10時30分発の新五合行の富士急行のバスに乗る。

三島では雲多く、天候の具合が案ざられたがバスの進行と共に、どうやら青空も顔を見せ始める。山麓の樹林地帯をジグザグに刻まれた舗装道路はなんとなく痛々しい感じがするが新緑の紅葉の頃は美しいだろうと話し合っていると間もなく、樹林帯を抜け出た所によく整備された新五合の終点到着。

ここまでは観光客が多くて満員である。簡単な昼弁当をとって登り始める。頂上の観測所の白いドームが直ぐ近くに見えるが、ここ新五合より高度差約1370メートルであるからのんびり登って6時間と計算する。ゆっくりゆっくり、ジグザグの登りにくい砂礫道を登る。日帰り登山客の下りてくる何人かに会う。突っかけ草履を素足で履いているような、ひどい連中が何人かいる。のんびりマイペースで登って3400メートルの9合目の小屋へは午後5時の到着。少し早いが比処はよく空いているようなので泊ることにする。夕食迄少し眠る。僅か7人で広い部屋の隅に蒲団を敷いてくれ、テントとは違った安らぎがある。

翌21日、4時過ぎに起き、少し東寄りの尾根まで御来迎を見に出かける。5時前に日の出。今日も終日の快晴を約束するような見事な日の出であった。朝食後、ゆっくり登り始める。浅間神社奥宮前に6時45分到着。剣ヶ峰へ白山岳と廻り吉田口頂上から御殿場口下山口までひと廻りする。早々に御殿場口より下山。6合5勺位から砂走りを下り、2合5勺の小屋に10時半到着。

2人共すっかり砂をかぶって、洗面用の水を買って顔を洗って、少しさっぱりした処でバス停まであと3K約30分という処で腰を下ろして、ゆっくり休憩。11時10分のバスを逃がしてタクシーを呼んで御殿場へ、御殿場から三島へバスを乗り継ぎ新幹線を利用して夕食前に帰神。富士山も随分近い山になったものだと話し合った次第。

註。夏の富士山はお盆を過ぎるとシーズンも終りという感じで山小屋も仕舞い始め、臨時バスは17日まで運行。電話も20日限りという現状。従って登山客もぐっと減って静かな山であったが、夏中の登山客の捨てて行った弁当がらや、空缶にはうんざりされてしまった。

## 雨 飾 山

新 川 利 夫

雨飾山という山を知ってからは何れその内に登って見ようと思いつつも意外に長い年月がたってしまった。それと言うのも以前は大糸線も全通して居らず交通不便であったのと直ぐそばに姫川をへだて、白馬連峰があり標高から言っても低いので何時も足は後立山の方に向いてしまい何れその内にと言う事で終わってしまっていたからでもあった。然たら年令的にも激しさより静けさを求める山旅に変わって来たし、さりとて少し刺戟も求め度いと言う欲張った気持ちで9月の三連休の山行に愈々雨飾山への計画が具体化した。そして雨飾山の付録として最近脚光を浴びて来た海谷山塊の様子も覗き見しようとロートル4名に片山明君を加え総勢5名9月12日大阪発の越後51号で出発した。

9月13日

親不知附近で夜は明けて来たが窓外は予期しないひどい雨である。暗い気持ちで糸魚川に着いたのが5時48分、比の調子では海谷の山も見えないだろうし直接梶山新湯に入るにしても雨の中を濡れるのも気が進まない。一層の事大糸線の中土廻りで小谷温泉で沈没するか、と迷っている内に大糸線の一番は出てしまった。何はともあれ先は腹ごしらえと待合室で朝食をとってゆっくりする内に雨も止み薄日がもれ出し青空も拡がり始めた。それでは出発とタクシーに分乗する。糸魚川の町を外れ、しばらく海川沿いに走った車は来海沢への道と別れ直接御前山の部落に向ってグングン高度を上げて行く。やがて駒ヶ岳のかまぼこを切った様な山容が現れ御前山の部落を過ぎ約30分で海川第一発電所に到着した。発電所の右手の石段を登り導水管を渡って山峡峠迄は約20分ゆるい

登りである。峠を境にしてあたりの風景はガラリと変わり真正面に千丈ヶ岳の岩壁が視界一杯に拡がり、上流阿弥陀岳の岩稜の奥に鉢山の怪異な山容が眺められる。千丈ヶ岳の岩壁は高距約500米深い海谷川の底から一気にそり立ち約4kmに渡りずらりと屏風のように連って居て壮観である。しかしブツモニもあり、岩質も岩登りとしては魅力に欠ける様な気がする。

あれこれと勝手なルート・ファインデングに花を咲かせた後、発電所迄もどり雲台寺で写真等とり乍ら御前山から新しく出来た車道をブラブラと梨ノ木から上野へと下る。はるか遠く残雪の朝日岳や明星山・黒姫山が見え展望の良い道だが車道の為ダラダラと長く上野へ着いた頃にはようやく睡眠不足がこたえて来出した。

バスは12時過ぎ迄無く此から街道を山口を経て梶山迄行くのかと思うと些かしんどくなって来る。バス停の所にある雑貨屋にへたり込んで飲物をのんで居る内に車が何とかならんものかと早速交渉に掛る。親切なおかみさんがあちこちと電話をしてくれ、やがて交渉成立、迎えに来てくれたライトバンに乗って大いに助かってホッとする。根知川を対岸に渡った頃より車の正面に雨飾山が大きく肩を張りキリッと耳をたて、堂々と姿を現わす。美しい姿である。

戦前昭和16年故深田久弥がそれも久しくあこがれてやって来たが天候に恵まれず引返し、此の街道を下るバスの中でその美しい山容を見て、「左の耳は僕の耳、右は、はしけしや君の耳」と即興に口ずさんだ紀行を思い出し、はるかに高い頂上を望み乍ら胸を躍らせる。

車は廃村となった梶山の少し奥迄入りそこからは山道となり川の左岸の山腹をまき乍らゆるく登って行く。左手には駒ヶ岳・鬼ヶ面山の岩壁が間近かに仰がれ気持の良い道である。途中日本一うまいと言われる冷清水で紅茶を湧かしたりしてのんびり登って行くと神難所沢の瀬音が現われる。

梶山新湯は古い小舎の骨組を残し建替えた二階建のひなびた山の湯で朋久堂の経営らしく涸沢や穂高のポスターが目立って居る。早速「都忘れの湯」と命名された露天風呂に飛込む。湯の中から鬼ヶ面や鋸山の岩峰を眺められて気分は良く浴後のビールで陶然となり夕方迄晝寝をする。

9月14日

気圧計は本日の好天を約束して居る。登山道は温泉の直ぐ上手にある薬師堂の所から神難所沢と鉢渡倉沢を振分ける薬師尾根の急登に始まる。木の根、岩の根を踏んで黙々と確ひたすらの登りである。それでも登るにつれて展望もひらけ、特に駒ヶ岳から鋸山に掛けての山容がなかなか見事に眺められる。高度1700米位で道は左にやゝ下り気味に、鉢渡倉沢の源頭に出て中ノ池に達する。中ノ池からは急なガラ場の直登で暗い木立の中に吸込まれる様に続くガラ場に最後の汗をしばる。

やがて雑木もなくなり笹が現われ高山らしくなるとやっと笹平に到着する。笹平は雨飾山の肩とも言ふ可き高原状の稜線で頂上は指呼の間にそびえ立って居る。秋を思わず空の下、リンドウの咲く稜線を頂上に向かって歩く気分は満点である。



頂上真下には池もあり左は荒菅沢に向って鋭く落込んで居る。

頂上は小さな双耳峰となって居り西峰には二三の石仏と薬師の小祠、東峰には2等三角点とケルンがあり展望は360度、今日は相憎北アルプス方面は雲が掛って僅か朝日岳しか見えないが、日本海から海谷山塊・焼山・火打戸隠とずらりと並んで居る。南面は前沢奥壁が頂上からスバリと切れ落ちるか下に小谷温泉の尾根が光って居る。頂上の気分を満喫した後鋸山と小谷への分岐点のピークでお茶を湧かし眺望を楽しみ乍ら晝食とする。

小谷側の下りも急天直下ひざのガリガリする様な下りである。木が生えて無いのではるか下に登って来る人のうごめいて居る姿が見える。それでも下りは早く約30分程で荒菅沢を渡る地点に下る事が出来た。此処から仰ぎ見る荒菅沢源頭、フトンビシの岩壁は素晴らしく道の直ぐ上から雪溪が続いて居る。

道は対岸に登り、ブナの原生林の中を山腹を巻き乍らゆるやかに下り奥ノツセ沢の出合で本流に下る。

時間も早いしそれにもういゝ加減くたびれて来たので紅茶を湧かしウィスキーを入れて元気を回復する。後は大海川沿いに湿地帯を横切ったりして下って行く。ツセ沢の出合からは伐採してしまっていて明るくなりやがて林道となる。振り返る雨飾山は秋空にくっきりと浮び出て最後の別れを惜しむ。休養センター雨飾荘でビールで一息つき更に長い車道を下る。

案の定小谷温泉は連休で満員、最終バス迄温泉に入ってさっぱりし今度の山旅のフィナーレを飾って乾盃する。良い気分でバスに乗込み中土に着いて見ると大糸線の上り列車はもう無い。気が付いて見ると温泉で調べた時刻は南小谷始発であった。切角南小谷行のバスを中土で下りてしまった訳で馬鹿見たいな話である。結局又南小谷迄タクシーを飛ばし19時20分の松本行に乗込む。松本でちくま2号の指定券が取れたのでそのまま夜行で帰った。

(パーティ) 前田浩、片山英一、新川利夫、川本勉、片山明

(時間記録)

9月12日 大阪(22.35) 越後51号  
9月13日 糸魚川(5.48~7.35) - 海川第一発電所(8.05~8.10) -  
山峽峠(8.25~8.50) - 雲仙寺(9.20~9.30) - 上野(10.30~10.45)  
- 梶山(11.00~11.05) - 冷清水(11.50~12.35) -  
梶山新湯(13.20)  
9月14日 梶山新湯(7.00) - 中ノ池(9.05~9.15) ~ 笹平(10.00) -  
雨飾山頂上(10.25~10.40) - 分岐点晝食(11.00~12.00) -  
荒菅沢(12.35~12.50) - 奥のツセ沢(13.35~14.00)

雨節荘(15.10~15.30) - 小谷温泉山田旅館(15.50~18.19) -  
南小谷(19.20) - 松本(21.26~22.27)

9月15日 大阪(5.56)

## 北 岳 (3192.4m)

(S50年9月13日~15日)

星 野 辰 也

夏山合宿を無事終えた今我々一年会員はKAC生活一年の反省と今後の飛翔の為に日本第2位の高度を持つ北岳行を決めた。一年会員はバットレス第四尾根より中央稜、新人会員は八本歯コルより本峰及び間ノ岳往復の計画のもとに残暑の厳しい神戸を出発した。

9月13日(晴)

甲府(8:00) - 夜又神峠(9:45) - 広河原(11:35) - 大樺沢二俣(13:30)

甲府につきさっそくバス停に行ってみるとなんとスーパー林道の赤沢橋とやらが流失してバスは不通との事である。しかたなしにタクシーの運ちゃんに行ける所までと頼んでとにかく出発することに決めた。夜又神峠まで来るとやはり一般車輛は通行止である。こうなればあせってもしかたがないと茶店で一服と久しぶりに関東風のうどんを食べる。

茶店のおっさんの話によると広河原までマイクロが折返し運転をやっているとの事である。不愛想な運転手をよそに林道を歩かずにすんだ我々は意気揚々と広河原に着いた。夏山合宿とは大違いで後は2時間も歩けばベースの二俣である。二俣ではバットレスを目指す者が多数テントを張っている。バットレスの印象はチンネのそれとは大部趣を異にしている。

9月14日(雨)

起床(3:30) - 出発(4:15) - 四尾根取付(6:30) - 登攀開始(11:00) - マッチ箱(12:00) - 中央稜取付(13:00) - 北岳山頂(16:45) - 二俣(18:15)

取付手前より降り出した雨はなかなかやまず、おまけにガスで視界は20m程度である。行くかもどるか? 3時間程雨やどりしたらどうやら雨は上がりそうである。時間も10時である。いよいよ意志決定をせねばならぬ。我々はなんの為にここまでやって来たのか?

ただ雨にぬれる為か否攀る為である。行こう四尾根へ中央稜へ!

9月15日(晴)

二俣(8:10) - 広河原(9:00) - 甲府(13:00)

甲府までまた長く高いバスの旅であった。スーパー林道は所詮人間の作ったものである。自然には勝てないのである。パーティー 幸内、田中、長島、桂正、鮑、星野

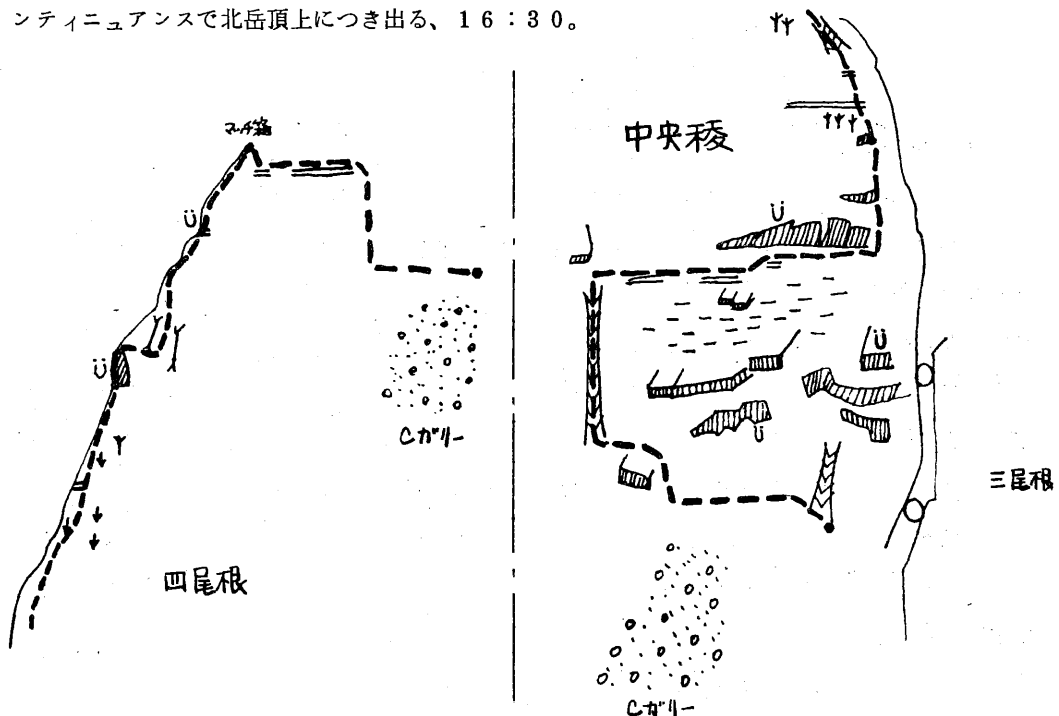
# 第四尾根・中央稜

長島安代

パーティ：田中一長島、星野一幸内

10:00、雨はあがった、行こう。ザイルをつけて2ピッチ、ここが取付点らしい。トップに登る。ザイルが40mいっぱいひる。視界は悪く、霧の中にトップの姿が消えてしまう。さきほどの雨で濡れている岩を慎重に登る。ルート図では捲いているオーバーハングもまっすぐ登り、5ピッチ目、あっけないぐらいにマッチ箱の科尔へ。視界がよければスリルも満点で悠長なことも言っていられなくなるだろうが、今は、かすかにDガリー奥壁が望めるだけである。ここより懸垂下降で科尔へおりる、12:00。

さあ、次は中央稜。Cガリーをまたぎ、取付きのチョックストーンを仰ぐ。オーバーハングのはり出しも、やはり威圧感がある。腹ごしらえをして、13:00、順番待ちの数パーティを後に、登攀開始、1ピッチ目、核心部のしごいトラバース、トップも手こずっている。岩がもろく、ビレー点に新しくピンを打つ。オーバーハングの下を腰をかがめながらトラバース。不安定なビレー地点でリンネを行くトップを見つめる。視界はいくぶんよくなってきたようだ。3ピッチ目、スラブラバース。打ってあるピンにほとんどザイルを通したので、ザイルが思うようにすべらない。慎重に通過、「雪彦の不行のトラバースに似ている」と、トップの声。ここからは、リッジを快適に落石に注意しながら登る。最後は足どりも軽く、岩影に咲く小さな花たちに眼を落としながら、コンティニュアンスで北岳頂上につき出る、16:30。



## 北岳バットレス

田中正裕

「マッチ箱のコル」 ぽつんと、この名前を口ずさむと御伽話に出てくる様な、なんと愛着のある呼び名でありましょうか。

北岳の本を見ると必ずと言ってよいほど、マッチ箱のコルが映っているのです。この写真を眺めながら、なんとなく、いつのまにか、好きになってしまいました。いつか岩登りを上達して、あのコルへ行ってみたいと思っていたのです。そのうち話が持ち上がり、このチャンスとばかりに、マッチ箱へ行けたことは、ひじょうな喜びでありました。なぜならば、私にとって岩登りを初めた迄の憧れの場所の一等にあげられる所だったからです。コルまで思っていたより短かく感じました。霧がそう感じさせたのでしょうか。しかし、あの写真に載っている所に私たちがいると思うと、満足感が湧きあがりました。が中央稜のことを考えると満足感に浸っているわけにはいけませんでした。

雨の為に濡れている中央稜を行けるのか心配でしたが、四尾根—マッチ箱—中央稜を結ぶことができ、憧れであった山行ができ、八本歯の下りの足取りの軽さに自分でも驚きました。

## 残念だった北岳山行

鮑 碧 琴

夏山合宿で見た北アルプスの雄大な山々、南アルプスは、いったいどんな山があるのだろうか？しっかりと見比べてやろう。日本第二高峰と言われる北岳が、間ノ岳からよく見えるらしい。その他多くの期待を、十分に満たせるだろうか？14日早朝、我らのバットレス突撃隊を見送った後、残った私たち縦走隊も出発だと思った。が、6時テントから頭を出して、空をあおいだ瞬間、今まではずんでいた心が、一度にしょげた。尾根から降りかかる霖は、あたりをおおい、雨は降りしきる。この天候で、行動するかどうかの判断が、なかなかつかない。それだけの山の天気に対する知識、経験がないことをつくづく感じた。9時頃、雨はぶつとやみ、間ノ岳までの縦走を、北岳本峰までに変更した。できるだけ縦走コースを避け、ガリ場を歩いた。比較的大きな岩を見つけては岩登りの練習をした。ガリ場歩きは、バランスのよい練習になる。

少しも晴れず、2時半北岳頂上到着。ガスがかかっている、ほんとに何も見えず、味気ない北岳縦走になってしまった。好天に恵まれる山行ばかりとは限らないが、今回の北岳山行はほんとに残念であった。今度また北岳に行きたい。そのときはぜひ北岳全景を見たい。

## 甲斐駒（黄蓮谷，尾白川本谷）

星 野 辰 也

10月10～12日

パーティー A班 黄蓮谷 三浦、幸内、星野

B班 尾白川本谷 野上<sub>3</sub>、田中、井上、岩崎、鮑

冬山合宿の目標が甲斐駒、仙丈と決定し、その偵察も兼ね例会を甲斐駒東北面の沢登りとした。

新人と一年会員が多数の山行であったが意気と若さで大きな成果を得られた。

10月10日

韭崎（8：00）－竹宇駒神社（9：15）－不動滝（10：25）－鞍掛沢出合（13：30）  
－噴水滝（14：10）－黄蓮谷出合（15：10）－A班黄蓮谷、B班尾白川本谷。

韭崎よりタクシーにて駒が岳神社に向う。目の前に摩利支天を抱いた甲斐駒が岳が圧的にそそり立っている。標高差2200m、南アルプスを代表する尾白川の溯行の開始である。寝不足と高まきに苦しめられたが、岩の白さ、水流の美しさはしばし疲れを忘れさせてくれる。黄蓮谷出合までは登山道も割に整備されており一般ルートとなっている。出合でA班、B班と別れ明日の駒山頂での再会を約束し、わらじにはき替え各ルートに向う。本日の入水者、岩崎、鮑

10月11日

A班 黄蓮谷遡行－駒山頂（13：45）、B班 尾白川本谷遡行－駒山頂（11：30）－北沢峠（17：30）

両班共無事遡行を終え山頂で360°のパノラマを楽しみ北沢峠へ下山。

10月12日

北沢峠（7：45）－丹溪小屋（8：35）－戸台（10：00）－伊那

本日は雨の中空腹をかかえてただ戸台に下山するのみである。若さの為か空腹を一刻もはやくいやす為かコースタイムの半分の時間で戸台に着く。久しぶりのまともな食事であった。しかし各自の服装はあまりまともでなかった。

## 黄 蓮 谷 遡 行

星 野 辰 也

パーティー 三浦（L）、幸内、星野

10月10日

合流点（16：00）－千丈ノ滝上部（17：00）

合流点で本谷班と別れ、わらじばきに替え千丈ノ滝を攀る。傾斜はゆるいがバランスの要求されるところである。しばらく河原を進み坊主の滝下部でビバーク。

10月11日

起床(5:00)―出発(6:25)―二俣(6:50)―奥千丈ノ滝(9:30)―インゼル(11:15)―奥の二俣(12:10)―頂上(13:45)

冷たい水流の中を進むと前方に坊主ノ滝35mが現われる。これを左岸を巻いてスラブの連続の沢を進む。やがて右俣の核心部奥千丈ノ滝200mが白い水流を持って現われる。ほぼ右岸よりにスラブの微妙なバランスを要求される登りである。上部は40mあまりの一枚のスラブでスタンスもホールドも皆無である。スリップしたら3人とも300mほどのスベリ台をダイビングすることになりそうだ。多くのパーティーはここを巻いている。しばらく進むとスラブの上部で、進退きわまっている単独行の者がいた。Mが困難なバランス登攀で無事救出し、次々に現われる滝を楽しみながらようやくインゼルに着く。ここらあたりから黄蓮谷も平凡となり、紅葉の坊主岩とハガ岳の遠望を楽しみながら、ガレ場を高度をかせぐのみとなる。やがて駒山頂あたりにKAC本谷班らしき人影が見える。コールするとやはりそうであった。あれだけ離れていてもKACはなぜかすぐ解るのである。

## 尾白川本谷遊行

野上<sub>3</sub>(I)、田中、井上、岩崎、鮑

鮑 碧 琴

10日午前8:35、駒ヶ岳神社バス停に到着。ここでたびにはき変え、尾白川上部の登山道を歩く。川には白い岩や石があり、名のごとく白い川が、樹々の間をぬって流れている。

約6時間かかり、15:15尾白川本谷と黄蓮谷の出合に到着。この付近では、黄蓮谷の方が本流のように見える。そして、お互いの無事を祈って、2つのパーティーに分かれた。私たちの本谷パーティーは、出合からしばらく続くナメ床と35mの滝を左岸にまいて、やぶの中を歩いた。

それを過ぎると、広く明るい河原に出た。左上を仰ぐと、北坊主の壁が、迫るようにそびえ立っている。まるい岩壁の上に木がちょろちょろとはえている姿は、もの寂しい頭のような。まもなく、日が頭の向こうに影をひそめたので、ここでビバークする。ちょうど4時であった。

翌朝は6:00出発。河原を行くと、やがて瀑流帯が見えた。ここもほとんど左岸のやぶの方にまいた。やぶの中から豪快な滝の流れを、耳にただけである。右岸のスラブに、西坊主ノ沢、滑滝沢、奥ノ滑滝沢の支沢がルンゼ状になって合流しているというが、あまり確認せずに通り過ぎた。

瀑流帯の最後を飾る30mの滝だけは、ザイルを使って登った。この滝を越えると、水は少なくなり、源流域に入る。ちょうど8:00であった。源流域を少し登ると、やぶ林に入った。やぶが雑生していて、非常に歩きにくかった。

最後の頑張り、稜線に9:15到着。ここでしばらく地図をひろげ、各山を確認。遠くに見えた槍ヶ岳には雪渓があった、その後、岩場ばかりを登り、11:00に駒ヶ岳本峰に到着。先月行った北岳では、天気が悪かったため見てなかった。北岳、間ノ岳、富士山などが全望できた。

そして、13:50に黄蓮谷から登ってきた先輩たちと無事合流。

#### コースタイム

10日 駒ヶ岳神社 8:35着 9:10発  
不動滝 10:25  
噴水滝 14:10  
出合 15:15  
11日 出 発 6:00  
30m滝の上 8:00  
稜 線 9:15  
駒ヶ岳頂上 11:00  
両パーティ合流 13:50

## 京都北山

### 祖父谷峠より天童山（城丹国境尾根）

新 川 利 夫

天気の良い三連休にじっとして居られず今年も一日秋の北山を歩いて来た。例に依って京都駅から雲ヶ畑までタクシーを飛ばす。祖父谷林道は可成奥まで入って居るので、バスで岩屋橋から歩く事を思えば時間的にも労力的にも大分助かる。

祖父谷峠の雰囲気は大分変って居り道も荒れて居るが、古い峠道なので昔の道は細々と続いて居た。峠から天童山迄の尾根は昔の山城丹波の国境をなして居て、小さなピークが10ばかりある。

峠から西へ1番目と2番目のピークに送電線の鉄塔が建って居り、7番目のピークが飯森山で、10番目が天童山である。その間のP8にマイクロウェーブの反射板が建って居る。祖父谷峠からP2迄は送電線の巡視路があって良く踏まれた道があるが、それからは細々とした踏跡が雑木林の中をぬって続いて居る。なかなか気分の良い道で静けさもあり、所々展望も開け北山の気分を満喫出来る所である。天童山から踏跡は北西に山国へと下って居るが、はるかに周山の町並が望まれ

るので山国經由より最短距離を取る可く頂上から西南に生じた尾根を下る。鞍部迄かすかに踏跡があったがそれも消へてしまったのでブッシュをこいで、小さなピークに登り浅い谷を見つけてゴソゴソと下る内に茶谷峠から鳴堂に到るトラバース道に出合った。

茶屋峠は伐採されて明るくなって居り、峠の地蔵尊が明るい陽光にむき出しになって立っているのは何だか物淋しい気分になってしまう。峠からカモチ谷を下ったが、平凡な谷である。

周山では発車は前のバスに間に合ったが高雄からは交通渋滞で進まず、満員立ち止めの2時間は少しきつかった。やっと着いた京都駅は人の渦で切符を買うのに30分も掛る様な始末であった。

(時間記録)

11月2日

京都(8:30) - 雲ヶ畑祖父谷林道終点(9:35~9:40) - 祖父谷峠(10:15~10:30) - P<sub>4</sub>(11:40~12:00) - 飯森山(12:50) - P<sub>8</sub>(13:10~13:15) - 天童山(13:30~13:45)

茶谷峠(14:35~14:45) - 下(15:40) - 周山(15:55~16:00) - 京都(18:00)

## 大峰山脈・弥山へ前鬼

鮑 碧 琴

メンバー：長島、岩崎、鮑

コースタイム：

1日

川合7:30、7:50~枋尾辻10:35~狼平13:38~弥山小屋13:53

2日

弥山小屋6:35~八剣岳6:52~釈迦ヶ岳10:53、11:44~大日岳後の分岐点12:18~沢へ13:00~川原にてピバーク15:30

3日

出発5:10~前鬼と沢との出合7:25~前鬼小屋8:20~前鬼バス停10:30

いつもは先輩のあとを夢中でついていっていることに止どまった山行をしている自分にとって、今回の自分たち新人だけの個人山行は、各方面で反省させられる点が多かった。

その中でも、読図力のなさは、いやというほど自覚できたと思う。

ルートについては、川合から頂仙岳、弥山、八剣岳、釈迦ヶ岳などを経て、前鬼へ至る尾根道の



縦走である。地図上では、頂上を通っているようでも、道はほとんどまいていた。頂上に立てたのは、弥山、八剣岳、釈迦ヶ岳ぐらいのもの。それにしても、頂上からながめた大峰の連峰には、アルプスのような息をのむ迫力とは異なる、穏やかさを感じるすばらしい山々だ。それをいっそうひきたてたのも、すばらしい秋晴れに運よくめぐり会えたおかげも一利あるように思う。

この附近の沢も比較のおもしろそうなのがあるので、次は沢から登ってみたいと思う。

## 大台・大杉悠歩

片山 富美子

何かをこわすとか、何かの失敗が突破口になって自分の内に充満する悲しみや叫びが、吹き出す事を私は今までに何回も経験している。今日、出勤して、ショーウィンドのガラスを割った事がきっかけになって、私は昨日の自然に抱かれたあの自分と対比して、涙が出てくるのを覚えた。仕事の関係上、地下での生活がほとんどになって、朝、日の光を浴びたら、再び地上に上がる時には日が暮れている……………朝と夜があって昼ぬきの生活……………私が夏歩いた山々は幻影だったのではないか、空も草も土の道も雪も……………

自然の確認をしたかった。あれが“まぼろし”ではないという確証がほしかった。

火曜と水曜の連休を利用して、田中、長島両氏を強引に誘って、大台ヶ原・大杉溪谷を目差す。

大和上市から大台ヶ原行のバスが一日一本であるという理由から月曜の夜、神戸を発ち大和上市に11時過ぎにつく。その冷え込みはやはり、山地を思わせ、朝はかすかに霜がおりたのを見た。

大台までの1時間40分のバスは最後の最後の紅葉を見せてくれ、バスの迂回路を見下す金剛山・生駒山も眺望出来た。日の出ヶ岳を登る時にはるかかなたに見えていた雲が実は伊勢湾の白波であるとわかり安堵した。堂倉小屋までのシャクナゲ坂、右耳には快よい滝の音、左耳には木々のざわめき、第一番目の堂倉滝が見えてきた。

ゴミが散乱しているのが悲しいが、本物の水が飛んできて、頬の皮膚のまだ正常である事を確認。

この白は本当の白、この緑は本当の緑。つり橋は、「これは雨に降られると危いぞ!!」と足をふんばってふんばって渡る。

光滝、七ツ釜滝……………とあっちゃこっちゃから吹き出して、「いったい、大杉溪谷という所は、どないなってんねやろ?」と感心する。久し振りに肩にかかるザックの痛みも快よく、鼻から入った大杉谷の空気は体じゅうを巡回して腋の下から抜けていくよう。

ろっ骨も健全なり。

ニコニコ滝を目の前において一泊。翌朝は乗船場までを2時間くだる。12時30分発のモーターボートだ。船長さんは出発までの時間をゆっくり釣糸をたらし待つ。乗客も3人、3人、3人、

1人、それに我々3人。山があって、杉があって、水しぶきがあって、雑音や騒音や雑踏もなく、自然にぽっかり抱かれて心のヒモが久し振りにとけるのを覚えた。

## 雑 感

### 山を想う一日

山をどんなふうに想い、どんなふうを感じ、どんなふうに山の影を心に映じているかを、自分の心にだけ、こっそり聞いて聞かせ、自分の山への想いを年々に枝をのぼして葉を拡げて、山に入る準備やほかの交渉に忙がしく動く時、山に入る自由と喜びを感じる。それが山に対するファイトと憧れになると思う。山が好きである事が第一の条件であり、その山に行く資格である。自由と自然の意味を正しく解して山のもっとも美しい有機的な行動を助長していくことを忘れてはならない。

人それぞれ個性や趣味や年齢、境遇、登山経験、技術、体力いろいろに相した山行と、素晴らしい友とで実現しなければならない。そうすれば山というものの、厳しさと優しさを自分の心に自然に分ってくる様に思う。理屈や理論でなく、行動であり現役である事である。そうすれば精神の向上にもなる。人と人の結ぶつき友情と愛とが結合され、よりよい人間性が育ってくるのだ。山を想えば人恋し、人を想えば山恋しと歌の文句ではないが、いろいろな自己の心の移きに対して、現実的な苦しみを味わい、乗り越えて一步一步山の心に、解け込んでいくと思う。大切にしたい自分の山行を、もっと自主的な行動を、それが今の新しい諸君に期待する言葉である。

ないとうまさし

### 「但馬をめぐる山々」改訂版を

武 田 禎

神戸山岳会を育ててきた但馬の山々。その記録を一つの本にまとめ、題して「但馬をめぐる山々」。但馬山塊の最初の案内書として発行して13年、それを土台に本格的なガイドブックを刊行して早や6年たった。

この数年、この山々もだんだんその姿を変えつつある。新しい林道が通り、ツアーコースはリフトの鉄塔が林立するグレンデになり、美しい溪谷にはダムが出来たりしている。

そこで提案したいのが「但馬を……」改訂版発行である。土台があるといっても、再版することは並大抵のことではない。しかし、いずれはせねばならないことでもある。それによって若い会員さんも、但馬に入って但馬を知り、理解することが出来るだろう。又、踏査から印刷まで、先

輩諸氏のお手をわずらわすことになると思うが、若い人達にとって忘れがたい思い出となろう。

最初の本の後記に先輩も書いていた。「…………… この冊子は、我々の青春の一時期を記念する貴重な『証』である……………」と。

## 会 員 動 静

### ○ 住 所 変 更

金 田 晏

▽ 321-31 宇都宮市鑑山町1927-2

TEL 0286-67-2141

## 編 集 後 記

登山家は執筆狂となる運命にある—これはマンメリーの言葉で、月報第3巻第4号(昭和38年7月1日発行)の丸屋信雄さんが引用されているのを再引用させていただいたものです。武田さんから「昔の月報は、後から山行する者にもちゃんと役立つ文章が盛られていた」とアドバイスされ、参考のためそれを借り受けたという次第。さすがにその言葉通り、山溪や岳人を読むよりずっとためになる。そう考えると、今月の月報、我々の後輩が読んで、そう言ってくれるだろうか。

狂わなくてもいいから、自己の山行を書き残すことに喜びを感じてほしい。武田さんからお借りした秘蔵月報、ご希望の方に期限付きでかします。(星野、長島、片山)

例会報告につきましては、その例会リーダーが提出して下さい。提出先は

▽ 657 神戸市灘区上野通1丁目2-35 413号

長 島 安 代